

エリートホテルマンは
最愛の人に一途に愛を捧ぐ

本郷アキ

Aki Hongo



Eternity
BUNKO

目次

エリートホテルマンは
最愛の人に一途に愛を捧ぐ

書き下ろし番外編

あなたとの未来

エリートホテルマンは

最愛の人に一途に愛を捧ぐ

第一章

二×××年九月――

林一華は、従業員更衣室で制服から私服に着替えると、壁にかけられたカレンダーを見て、大きくため息をついた。

ここグランドフロンティアホテル&リゾート東京は、東京都港区にある外資系のラグジュアリーホテルで、一華は宿泊部フロント課でフロントサービス係として働いている。今月は土曜日のお休みが多くなっちゃうな……

九月から十月にかけては、弟妹たちの運動会がそれぞれ開催される。そのどれもが土曜日だ。なるべく母が生きていた頃のようにと思っても、自分の仕事の都合もあり難しい。もちろんあらかじめ休みを申請しているのだが、周囲から……というか、なぜか自分を目の敵かたみにしている後輩から、また嫌味を言われるのだからうなと考えると、ついため息が漏れてしまったのだ。

（ほかの人はなにも言わないし、気にしないでいいって大木マネージャーも言ってくれてるけど、私ばかり何度も土日にお休みをもらっていたら、ずるいつて思う人がいるのは当然だよ）

一華としても、お客様の多い土日祝日はなるべく出勤したい。お客様が増えれば、その分、問題も起きやすくなる。なるべくフロント対応に慣れた自分が入るべきだと思っではいるのだ。ただでさえ、正規雇用でありながら日勤の八時から十七時の固定シフトで、夜勤は免除してもらっているのだから。

（せめて末っ子の亜樹あきが小学校を卒業するまでは、行事を見にいつてあげたい。小学校卒業するまでって、あと十年近くか……）

あまりの先の長さに、ふたたびため息が漏れそうになる。

（それより、もうこんな時間。早く行かなきゃ。ご飯の用意はしてくれてるはずだけど、待ち合わせに遅れちゃいそう）

一華は鞆かばんからメイク道具を取りだし、ロッカーに備え付けられた鏡を見ながらファンデーションを塗り直す。

鏡には、二十七歳という年齢よりもやや幼く見える、疲れた女の顔が映っていた。

浮きでた目の下のくまと、緊張が緩み、げっそりとした表情を見ると、よけいに疲れてくる。仕事中は常に笑顔かほを絶やさずにいるから、顔の筋肉を緩めるだけで全身からどつと力が抜けそうになるのだ。

その頼りなげな雰囲気に庇護欲をそられる男性も多く、手を差し伸べたくなるような不思議な魅力がある——ということとは、本人だけが知らないのだが。

「うん、こんなものかな？ またあの人に会って嫌味を言われたくないし、さっさと行こう）」

アップにした髪はそのままにした。癖のつきやすい髪は、解くとうねって広がってしまふ。頭が引っ張られるような感覚がして疲れるものの、帰るまでの我慢だ。

一華はリップを薄く引き、頬に力を入れて口角を上げた。鏡には先ほどまでフロントに立っていたホテリエの姿がある。全身鏡で身だしなみをチェックしてからロッカーの扉を閉めた。

素朴とも優しそうとも言われる顔立ちは、決して目立つ方ではない。

しかし、化粧をして肩の下まである茶色の髪をシニヨンスタイルでまとめているだけで、清潔感のある落ち着いた美人「風」になるのだから、不思議なものだと一華は思う。

それも、一華がホテル業界に携わるようになって身についた武器の一つである。

グランドフロントエアホテル&リゾート東京を訪れるお客様の中には、超一流と呼ばれる人々もいる。彼らは総じて高級ブランドに身を包み、一流のサービスを求めるのだ。その求めに応じるため、清潔感のある身だしなみ、教養、品格を身につけるのはホテリエにとって当然のことであると教えられた。高級ブランドをほいほい買える金はなく

とも、見た目に気を使い、諸先輩方の気品ある佇まいを真似すると、自分の品格が多少は上がったような気がした。

「お疲れ様です」

一華がメイク道具を鞆にしまっていると、今、一番会いたくなかった人の声が更衣室に響いた。

思わず、がっくりとうなだれそうになるが、気を取り直して背筋を伸ばす。

「……お疲れ様です」

彼女——麻田唯は、宿泊部客室課でハウスキーパーを担当している。半年ほど前、ちょうど総支配人が代わった頃に契約社員として入社した後輩だ。目鼻立ちのはっきりとした美人だが、かなり自分に自信があるようで高慢な物言いをするため、きつそうな印象を受ける。

一華はなぜか彼女から目の敵にされており、顔を合わせるたびに嫌味を言われていた。だから唯と鉢合わせする前に帰ろうと思っていたのにタイミングが悪い。

「あ、そうだ、林さん」

唯は、どいてと言わんばかりにロッカーの前に立っている一華を見つめた。一華は仕方なく一歩横にずれて彼女が通る道を空ける。

（一応、私、先輩なんだけどな。話し方も相変わらず直らないし……）

自分に対して大袈裟にかしこまってほしいわけではないが、彼女の「おっはようございまあ〜す」という挨拶を初めて聞いたときは、気が遠くなったものだ。

たとえ契約社員であっても、唯のような間延びした喋り方をしていれば、厳しい入社前研修で徹底的に直されるはずである。それに、研修で頭叩き込まれるはずの館内店舗の営業時間や場所すら頭に入っておらず、さらにVIPのお客様相手に媚びを売るような態度も目につき、何度か言葉遣いと共に指摘をした。

（うちのホテルって従業員教育はかなり厳しいはずだし、マネージャーからも注意されてるはず。あまりにもひどいと正社員でも退職勧告されるって知ってるよね……大丈夫なのかな）

彼女の教育は一華の仕事ではないが、たとえ課が違っても同じ宿泊部の同僚だ。彼女の今後のためにも、心を鬼にして間違いを指摘していた。ただ、その場ではしおらしく謝るのだが、一向に態度は改善していない。

「麻田さん。その『さーん』って言うの、直しましょう」

「あはっ、すみませーん。まーた、やっちゃった。でも別にここならいいじゃないですか」
「でも、普段から気をつけていないと……」

「も〜ほんと細かい。お客さんの前ではちゃんとしまーす」

唯は悪びれない態度で言った。

（彼女って、私と同じ年だよ。社会人経験、ちゃんとあるよね？）

失礼な言い方だが、契約社員だからと仕事を舐めているのではないか、という疑惑を抱いてしまう。

家庭環境もあり、一華は二十七歳という年齢のわりに老成した印象を持たれるのは自覚している。とはいえ、十代の頃の自分でさえ、今の彼女より常識があったのではないかと思っ。

このホテルでは、世界各国どの支店においても雇用形態にかかわらず、従業員の満足度を大事にしている。

契約社員だからといって冷遇されないし、時給もいい。正社員になればキャリアアップを望め、給料が格段にアップする。

ここで働く従業員たちは、正社員だけでなく契約社員もかなり多くの研修を受けており、社員教育が充実していた。個人の裁量に任せられることも多く、契約社員や派遣社員に対しても一定の権限が与えられているくらいだ。

たとえば、クレーム対応で毎回直属の上司であるマネージャー——各部門の支配人に確認を取っていたら、さらに相手の怒りを買うことにもなりかねない。そのため十万円程度であれば、マネージャーに指示を仰がなくても自分の裁量で使用できるようになっている。

ただその分、従業員に求められる能力は大変高い。誰も口には出さないが、唯がよく面接と研修を経て採用に至ったな、というのが宿泊部スタッフたちの共通した見方であった。

「それで、なにか？」

一華は鞆を肩にかけて、唯を振り返った。

「あ、そうそう。宿泊部の大木マネージャーが困ってましたよ。林さん、今月三回も土曜日に休むからシフトの調整が大変だって。それにみんなも言ってます。林さんだけ夜勤免除されるのはずるいって」

あの大木がそんなセリフを言うものか、と一華は心の中だけで反論した。

一華が土曜日に度々休みを入れるせいで困らせているのはたしかだろうし、口には出さなくとも一華の処遇をずるいと思う従業員もいるだろう。だが、このホテルにおいて、部下の愚痴を周囲にこぼすような社員がマネージャーでいられるはずがない。

（むしろ私が配置換えを希望しても、大木マネージャーは『弟さんが小さいうちは無理をしなくていい。いつか自分がしてもらったのと同じように、困った人を助けてあげなさい』って……『無理なくシフトを調整するのも僕の仕事だから』って言ってくれたんだから）

もし本当に唯の言うとおりシフトの調整に無理が出る場合は、話し合いで配置換えを

するなどの相談があるはずだ。

「今月は弟妹たちの運動会があるんです。マネージャーにはもちろん許可をもらっていませんから」

ただ、自分が周囲に迷惑をかけている自覚は十分にあったし、心苦しさも当然ある。

一華が夜勤に入れない分、ほかの社員の負担が増えているのは間違いない。

（せめて、裕樹ゆうきかふたばに頼めればいいんだけどね）

三回ある運動会のうち、一回は大学生の次男である裕樹か、高校生の次女ふたばに行ってもらおうとも考えたのだが、二人にはまだ三歳の亜樹の面倒を見てもらっているため難しい。九月の炎天下に、亜樹を連れて外にいるのは、かなり辛いだろう。

一華が言うと、唯は眉根を寄せて不快感をあらわにした。

「お母さんが亡くなつて、林さんが母親代わりなんでしたっけ？ それは大変だと思えますけど、迷惑かけてるって自覚ないんですか？」

母が亡くなったのは亜樹が生まれてすぐ、一華が正社員として働いて二年が経った頃だった。産後の肥立ちが悪く、そのまま帰らぬ人となってしまったのだ。

あまりに突然のことで、一華は母を失ったショックよりも、この先、自分たちはどうすればいいのかと考えてしまった。

一華は八人きょうだいの長女で、亜樹は生まれたばかり。父は長距離トラックの運転

手をしており、家に帰らないことが多い。

一番上の兄はすでに結婚して家を出ていたので、長女である自分が幼いきょうだいの面倒を見なければならぬとわかっていた。

家事に育児に仕事。精神的な負担と肉体的な疲れは大きく、三年経った今でも状況はそう変わっていない。

(でも、昔に比べればまだマシだけどね)

亜樹がゼロ歳の頃は本当に大変だった。夜泣きする亜樹にミルクをやり、朝まで一睡もできずそのまま職場に行ったこともある。

どうして自分ばかりがと思っても、誰の前でも涙を見せられなかった。母が亡くなったみんな辛い思いをしているのに、姉である自分が泣き言を言えるはずがない。夜中に亜樹にミルクをあげながら、毎日のように人知れず唇を震わせていた。

いろいろなことを諦めた。一つ目は恋愛。二つ目は友人との交遊。三つ目は、辛さを顔に出すこと。そうしなければ、とても、母親代わり、なんて務まらなかったのだ。

(だからこそ、彼と出会えたのは本当に幸運だった)

一華はこのあとの約束を思い出し、腕時計に視線を走らせた。

そろそろ出なければ約束の時間に間に合わなくなってしまう。

一華は唯に向き直り、はっきりと告げた。

「もちろん、ほかのフロントサービス係に迷惑をかけているのはわかっています。ですが、これは大木マネージャーとも相談して決めたことです」

「迷惑かけてるってわかってるなら、フロントサービス係じゃなくて裏方仕事に異動したらどうですか？ アルバイトのときはハウスキーパーだったんでしょ？ 花形のフロントより掃除している方が林さんに似合うと思うんですけど。それにハウスキーパーは日勤なんだから、特別扱いされてるなんて言われなくて済むし」

さも、いい案だと言わんばかりに唯は人差し指を立てて、形のいい唇を歪ませた。

正社員としての勤続年数は五年になるが、少しでも家計の助けになればと、一華は高校生のころからこのホテルでハウスキーパーのアルバイトをしていた。

テレビで観たホテルの華やかな内装がまるで別世界のように思えた一華は、洗練されたホテリエの行き届いた接客に憧れ、アルバイトの面接を受けた。

そして大学三年の時、当時の総支配人から、正社員の面接を受けてみないかと打診されたのだ。

当然、面接を受けさせてくれるだけで内定がもらえるわけではなかったが、一華はここで働きたいと強く思った。最終選考まで残り、花形のフロントサービス係に採用が決まったときは、驚きすぎて言葉をなくしたくらいだ。

「フロントもハウスキーパーも、似合うとか似合わないとかそんな理由で決められてい

るわけじゃありませんから。マネージャーから配置換えの打診があったなら、すぐに受け入れるつもりでいます。もういいですか？ 私、早く帰らないといけないんです」

「でもっ、みんな林さんだけずるいって言ってます！ 夜勤もやらないくせに、フロントサービス係にいるなんて！ どうして私が掃除の仕事で、あなたみたいな人が花形のフロントなの!？」

唯は顔を真っ赤にして、唾を飛ばさんばかりにまくし立てた。なんだかんだと言いながらも唯の本音はそれだ。花形のフロントサービス係に一華がいて、自分がハウスキーパーであることが気に食わないらしく、何度もマネージャーに配置換えを訴えていると聞いた。

ほかのフロントサービス係には一応は先輩を立てるような態度を取っているのに、一華にだけあたりが強いのは、おそらくその「特別扱い」が理由だろう。

（プライド高そうだし、好かれていない私が言葉遣いとかを指摘したのがまずかったのかも……でもやっぱり、ハウスキーパーをバカにするような発言をそのままにはしておけない）

フロントサービス係が花形と呼ばれているのは、それだけの能力を求められるからだ。けれど、その役割はハウスキーパーと比べるものではない。どちらもなくてはならない仕事だ。

「夜勤についてもマネージャーの許可をもらっているって何度も言ってますよね。それに私だって、そのうちフロントサービス係からどこかに異動になるでしょう。フロントサービス係に来たいのなら、私にケンカを売ってないで契約社員から正社員になれるように努力したらどうでしょうか？ 正社員は、日本語以外に二カ国語の言語取得が必須なので、研修は厳しいけれど」

そう言うと、制服のブラウスを脱いでいた唯がぴたりと手を止めて、こちらを睨みつけてきた。

「そんなの知らないし！ 私、頼まれてここに来ただけなんだから！」

「頼まれて？」

唯の言葉に引っかけかりを覚えて聞き返した。

（もしかして……コネ入社？ 私もアルバイトの時に声をかけられたから、コネと云えばコネだけど……）

グランドフロントティアホテル&リゾートは、世界的にも知名度のある格式高いホテルだ。

採用試験はかなり厳しく、最終面接は一人二時間にも及んだ。語学能力、判断力、適応力を試され、胃が痛くなる思いをしたものだ。

このホテルでは、ゲストからの依頼には決して「ノー」と言ってはならないと決めら

れている。面接ではそれを何度も試されるのだ。面接のあとの研修でも、嫌がらせかかと思えばドクレーム対応をやらされたし、できなければ何度もやり直しをさせられる。(コネ入社だから、面接も研修も受けなかったって言うの？ そんなのあり？)

能力のない人材をコネであつても入社させるだろうか。いずれにしても、研修くらいはちゃんとしてほしい。迷惑を被るこうむるのはお客様なのだから。

「私、総支配人のお母様にお願ひされてここに入ったんです。それなのに、なぜか総支配人にフロントサービス係はだめって言われて。私、仕事柄ずつと経営者とかを相手に接客してきたから、そういうお客様扱いはお手の物なんですよ？ そんな私が掃除しかやらせてもらえないなんて、宝の持ち腐れだと思いませんか？」

「総支配人のお母様……ですか？」

思わず聞き返すと、待つてましたとばかりに彼女の口が軽くなる。

「総支配人って、ワシントン支社から来た超エリートなんですよ。あ、林さんは会つたことありません？」

このホテルの総支配人が代わつたのは半年ほど前だ。前総支配人はアメリカの支店に戻つたと聞いた。

まさか現総支配人が、一契約スタッフである唯と親しい関係だとは思つてもみなかつた。彼女が総支配人のコネで入社したのなら、面接もなく採用されたことにも納得だ。

このホテルのトップならば、人事に手を加えることくらい、いくらでもできる。

「私は、お目にかかったことがないですな」

「でしようね。ま、私は彼のお家にも行つたことがあるので」

唯は意気揚々と口角を上げながら言つた。

このホテルで働く従業員は六百人にも及ぶが、通常一華たち社員に指示を出すのは、支配人であるマネージャーだ。マネージャーは、宿泊部、客室部、宴会部、料飲部など各部署におり、彼らが総支配人からの命令を聞き、指示を出す。

もちろん、総支配人が各部署を訪れることもある。だが、総支配人が打ち合わせなどでフロントを訪れるのは従業員が少なくなる夜で、一華はその時間すでに退勤していた。「彼、めちゃくちゃイケメンだし、それでいて優しいんですよね。物腰も柔らかいし、口調も丁寧だし。さすがお金持ちって感じ。マンションもこのホテル並みに立派だし」
たしか三十代の若さで総支配人の地位に上り詰めたと聞いたが、有能だという噂は、所詮、噂でしかなかったのかもしれない。唯の話を鵜呑みにはできないが、もし本当だとすれば、彼女をコネ入社させた総支配人に対する印象はかなり悪い。自宅に呼ぶような仲なのは個人の自由だが、仕事に持ち込むのはいかがなものか。

「そうですね」

頼むから唯をフロントサービス係には配属してくれるなと祈りながら、一華は踵かかひすを返

した。いつまでも唯と話してられない。今日は大事な用があるのだ。

「では、お先に失礼します」

「あ、いつでもフロント交代しますんでー！ 考えておいてくださいね！」
話す前に「あ」と付けるのも注意した方がいいだろうか。そう思いながらも時間と天秤にかけた結果、一華はなにも言わずに更衣室をあとにしたのだった。

ホテルを出た一華は、最寄り駅に急いだ。改札付近を見回すと、タクシー乗り場の近くに立つ彼——川島明彦かわしまあきひこがこちらに向かって手を振っていた。

今日は、婚約者である明彦を家族に紹介する予定だった。平日だが、仕事でほとんど家にいない父に合わせる形で今日の食事が決まったのだ。

「明彦さん！ お待たせしてごめんなさい！」

一華が息せき切って彼の前で頭を下げると、彼は笑顔で首を振った。

「いや、二、三分過ぎただけだから気にしないで。行こうか」

「うん」

一華は、明彦とタクシーに乗り込み、自宅の住所を告げた。

自宅は東京都文京区ぶんきょうく内にあり、ここからタクシーで三十分ほどだ。

明彦とは半年ほど前に婚活アプリの運営会社が主催するパーティーで知り合った。恋

愛も結婚も諦めていた一華が婚活アプリに登録したのは、ホテルのお客様で友人でもある女性に、自社の婚活アプリに登録してパーティーに参加してほしいと頼まれたからだ。一華は、今後ホテルで婚活パーティーを開催したときにこの経験が生かせるかもしれないと考え、承諾した。

パーティーに参加したものの、結婚するつもりはなかったため、プロフィール欄に正直に家庭環境について書いた。何人か話しかけてきた男性もいたが、皆、一華のプロフィールを見て申し訳なさそうに去っていった。そんな中、明彦に声をかけられたのだ。痩せていて頼りなさげではあったが、穏やかで優しい話し方をする人だと思った。

プロフィールによると、明彦は四十二歳で結婚歴はなし。両親と三人暮らしとのことだった。一人っ子だから、一華のような大家族にずっと憧れていたのだと彼は語った。弟妹たちの面倒を見ているなら自分もその助けになりたいと言われ、すぐさま交際を申し込まれた。そんな積極的な彼のアプローチに負け、数ヶ月前に結婚を前提とした交際に至ったのだ。

彼はデートのたびに具体的な結婚後の話を語ってくれた。新居も一華の実家近くに構えよう、君が母親代わりになるなら、僕が父親代わりになるとまで言ってくれた。

一華の家庭の事情で、デートの回数は片手で数えるほどだったし、当然外泊もできなかったが、一華の家族を含めて大事にしてくれることが嬉しかった。

明彦の存在は、恋愛も結婚も諦めていた一華にとって、救いのようなものだったのだ。「そういえば、一華が遅刻なんて珍しいよね。仕事が忙しかったの？」

明彦に聞かれて、一華は帰り際の唯とのやりとりを思い出し、かすかに眉を寄せた。

「ちょっと更衣室で後輩に捕まっちゃって」

「ああ、もしかして嫌味を言ってるっていう、例の？」

「そうなの……今月弟妹たちの運動会があるって言ったでしょ？ 土曜日にお休みをもらっているから、その件で」

「ああ、そういうことか。家庭と仕事の両立は難しいね」

明彦は、一華の愚痴を肯定も否定もしない。事なかれ主義と言えるのかもしれないが、彼との会話にストレスを感じないでいられる。一華は彼のこういうところを尊敬していた。勢いに流されるがまま交際を決めてしまったけれど、明彦と結婚できたら幸せだと思っただけは間違いない。

「本当にね……これから先、あなたにも迷惑をかけてしまおうと思うんだけど」

「結婚したら、僕もなるべく手伝うようにするよ。弟さんや妹さんたちの世話も含めてね。小さい子は好きだから、楽しみだよ」

明彦は、わかっていてというように一華の言葉を遮って続けた。

「ありがとう。そう言ってくれると心強い。明彦さんのご両親に会うのは来週だよね」

「ああ、母も楽しみにしてるって」

「良かった」

彼の両親に挨拶を済ませたあと、結婚式の日取りを決めて入籍する予定だ。実家の近くに引っ越しをして食事をそちらで摂るようにすれば、負担も少なくなるねと話をしてる。しばらくは慌ただしいが、いずれはその生活にも慣れるだろう。

「楽しみだなあ。美智ちゃんみちちゃんは小六で、詩織ちゃんしおりちゃんは小一なんだっけ？」

「うん、そうよ」

明彦はにこにこ笑いながら言った。

彼はよく、美智と詩織の話の聞いたり、写真や動画などを見たがったりした。自分の家族と仲良くしようと思ってくれるのは嬉しいが、そういえばどうして美智と詩織ばかりなのだろう。それについて聞いてみようと思おうと口を開く前に、タクシーは実家の近くの道に入った。

「お客さん、このあたりですか？」

「はい、その道を右に曲がって……」

家への道を運転手に説明すると、タクシーは路地に入り、細い道を進んだ。

「はい」

家から数メートルの場所でタクシーを停めて、二人は車から降りた。

一華の実家は古びた二階建ての一軒家で、軽自動車がりぎり一台停められる庭がある。最寄り駅まで徒歩十五分とそれなりにかかるうえ、L字型の旗竿地であることから安く家を買えたのだと父が言っていた。

父はまだ家に帰っていないように、庭には車が停められていない。

「どこ？」

「うん。父はまだ帰っていないみたいだから、中で待っていて」

「そっか。じゃあ美智ちゃんと詩織ちゃんと遊ぶ時間もあるかな。お父さんは長距離トラックの運転手なんだっけ？ 忙しくて、あまり家にいないんだよね？」

「そうなの。たまに帰ってきてても見るのは寝顔ばかりだし。お父さんがいなくても、弟や妹たちがしつかりやってくれるから助かるけどね」

「そうか、それじゃあ大人がよく見えてあげないといけないね。僕に懐いてくれるといいいな」

「ええ、きつと気に入ると思う」

一華は玄関のドアを開けて、中に向かって「ただいま」と声をかけた。奥のリビングから、大学生の次男、裕樹の叫び声と共に、ドタドタと走り回るような音が聞こえてくる。おそらく一華が帰ってきたことに気づいていないのだろう。それもいつものこと

だった。

林家は四LDKだが、八人暮らしだ。一人一部屋なんて贅沢はできず、一部屋は父に、ほかの三部屋はきょうだいで分けて寝室としている。

「どうぞ」

「お邪魔します。賑やかだね」

「ふふ、静かなのは寝ているときくらいかな」

ばたとドアの閉まった音が聞こえたのか、リビングのドアが開き、亜樹が裸のままこちらに向かつて走ってきた。

「一華ねえちゃん！ おかえりなさいー」

「ただいま、亜樹。ちゃんとパジャマを着ないと風邪を引いちゃうよ」

マントのように身体に巻きついたバスタオルで濡れた髪を拭いてやると、亜樹が気持ち良さそうに目を細めた。すると奥から怒鳴り声を上げながら裕樹が出てくる。

「姉ちゃん、おかえり！ こんな状態でごめんな。あくもう亜樹、お前、身体を拭いて言っただろ！ 廊下が濡れる！ それにお客さんが来るから静かにしとけて言ったのに」

裕樹は大学生だが、一華に続いて林家の育児を担ってくれている。巻きつけたバスタオルで亜樹をがっしりと捕まえた裕樹は、そのまま小さな身体を脇に抱えて持ち上げた。

亜樹は「きゃー」と叫びながら、楽しそうに足をぶらぶらさせている。

「こうなつてると思つてたから大丈夫。裕樹、こちら川島明彦さん」

「はじめまして、川島です」

明彦が頭を下げると、裕樹も軽く会釈する。明彦の目は裕樹ではなく亜樹を捉えていて、子ども好きだというのは本当なのだなと感じた。

「ちわつす」

「こら、ちわつす、じゃないでしょ。明彦さん、ごめんなさい玄関で。入つて」

一華は滅多に使わないスリッパを出し、明彦の前に置いた。

「ありがとう。子どもは元気だね」

「本当にね。私にもその元気を分けてほしいくらい」

明彦を伴いリビングへ行くと、次女のふたばと三男の芳樹、三女の美智、四女の詩織が一斉にこちらを見た。真っ先に立ち上がり、一華のもとに来たのはしつかり者のふたばだった。

「こんばんは、次女のふたばです。私は高三。で、あつちでふてくされてるのが三男の芳樹、中三。芳樹は今、反抗期だから、態度悪いけど気にしないでくださいね。キッチンにいるのが三女の美智、小六。テレビの前で本を読んでいるのが四女の詩織、小一。裕樹兄に抱えられてるのが末っ子の亜樹。一番上の兄は結婚してここにはいません。よろ

しくお願いします」

ふたばが弟妹たちを指差しながら、一人一人紹介する。すると反抗期と言われた芳樹が、ダイニングテーブルで読んでいた参考書を乱暴に閉じて、口を開く。

「……つるさいな、反抗期はお前だろ！　しょっちゅう裕樹兄に突っかかっているじゃんか！　俺は受験勉強で疲れてるだけだ」

「ほうら、出た。そういうところが反抗期だつて言ってるの！　お客さんの前でくらい静かにできないわけ？」

ふたばも負けじと言い返す。この二人は小さい頃からケンカばかりで、それを止めるのはいつも一華と裕樹の役割だった。明彦が来ているため多少遠慮はしているようだが、普段は手や足が出る。

「はあっ!?　お前の方がうるさいし！」

「やめなさい！　二人とも！　本当にごめんね、これでも今日はおとなしい方なんだけど」

一華が止めると、ふたばと芳樹が気まずそうに目を逸らす。一緒になつて怒られたふたばは、あからさまに不服そうな顔をしている。ふたばは他人の前だとお姉ちゃんになりたがるからと、一華はため息を呑み込んだ。

「いやいや、元気があっていいんじゃないかな」

明彦の視線はふたばを通り越し、キッチンにいる美智に移った。彼が、美智のスカートで視線を止めたような気がして、なんとなく違和感を覚える。

（あれ？ 美智のスカートにゴミでもついてたかな……？）

それにしても、やたらと凝視していたような。

「みんな可愛いね」

明彦がこちらを見て、いつもと変わらない様子で笑みを浮かべた。

その瞬間、明彦が急に足を持ち上げ、顔を歪めた。

「いて……っ」

「どうしたの？」

「いや、足になにか……」

足下を見ると、床に亜樹のおもちゃが散らばっている。片付けなければまた踏んでしまいそうだ。

「ごめんさい。これ亜樹のおもちゃなの。片付けるね。明彦さんは、ソファアに座って待ってて」

「うん、わかった。いいよ、ゆっくりで」

「ありがとう。亜樹ゝ寝る前に、出したおもちゃを片付けて！」

一華が叫ぶと、亜樹の「はい」という明るい返事が聞こえてくる。おそらく今、裕

樹に歯を磨いてもらっているのだろう。一華は亜樹が自分で片付ける用の大きいおもちゃだけをソファアに残しておき、ほかのおもちゃを片付けていく。

すると、ソファアに腰かけた明彦に、詩織が話しかけた。

「ねえねえ、本読む？」

「そうだね。読んであげようか？」

「うん！」

詩織は嬉しそうに頷き、明彦の隣に座った。

ちよどよよかった。落ち着くまで詩織に明彦の話し相手を頼もう。手がかかる子ではないし、父が帰ってくるまでソファアに座って話してもらえれば、その間に多少片付けができる。

（仲良くできそうでよかった）

子どもが好きという話は本当らしく、ほっとする。

「そうだ！ 一華、みんなの写真を撮ってもいいかな？」

しばらくすると明彦に聞かれて、一華は手を止めた。

「ほら、一華は忙しいから、なかなかきょうだいの写真を撮る機会がないと思ってね。子どもの成長の記録って大事じゃないか。あ、もちろん一華にもあとで送るよ」

「そうね……ありがとう」

「じゃあ撮るね。詩織ちゃん、スマホ見て」

一華が許可を出すと、明彦は嬉々とした様子でスマートフォンを取りだし、詩織に向けた。詩織はスマートフォンの前でピースサインをする。

「美智ちゃんも、こっち向いて！」

明彦はキッチンにいる美智にもカメラを向けた。料理中に声をかけられた美智は、不機嫌そうに唇を尖らせて振り返った。

「なに？」

「撮ってあげるよ」

片付けをしながら横目に明彦を見てみると、彼は美智と詩織ばかりを写真に収めていた。芳樹やふたばには目も向けない。

（気にしすぎかな……）

明彦はひとしきり写真を撮ったあと、ふたたび詩織とソファーに座った。

しばらくして、一華が二人に視線を向けると、明彦が詩織に覆いかぶさるようにして本を覗き込んでいる。それがやけに距離が近すぎるように思えて、気に掛かった。

なにかいやな予感がしてきた一華は、手を動かしながらも二人を見つめる。すると、明彦の手が伸びて、詩織の脚に触れようとした。反射的に、一華は叫ぶように彼の名前を呼んだ。

「明彦さん！」

明彦は慌てたようにびくりと肩を震わせて手を引く。その様子を見て、彼に対する信頼が徐々に失われていく。

「な、なに？ もう片付け終わったの？」

「ううん、そうじゃないんだけど」

明彦をこの家にこれ以上いさせるのは危険だと、一華の勘が言っている。

「今、連絡があつて、お父さん遅くなりそうなの。悪いんだけど、やっぱり日を改めてくれない？」

一華はポケットに入れていたスマートフォンを手に取り、小声で言った。すると、明彦が納得した様子で頷く。

「そうなんだ。なら、仕方がないね。お土産は置いていくから、みんなで食べて」

「ありがとう」

リビングを出ていく明彦に、ふたばが「あれ、もう帰るの？」と首を傾げる。明彦はちらりとふたばを見たが、一華に向けるのと同じ顔で笑い「またね」と言った。

「ちよっとね、日を改めることになったから」

一華はそう説明して、明彦と共に玄関を出た。

彼がどうして一華と結婚しようと思ったのか、わかってしまった。

なぜ、今まで独身だったのかも。

（今まで、弟妹たちには会わせる機会がなかったから、気がつかなかった。この人、言葉通り、幼い子どもが好きなんだ）

結婚する前で良かった、と身体から力が抜けそうになる。もし一華が彼と結婚していたら、美智や詩織、亜樹になにかされていたかもしれない。本当にただ子どもが好きだけかもしれないが、自分のこういう勘は信じることにしている。

一華は仕事でこれまで何百人、何千人というお客様を見てきた。お客様の関係が友人なのか恋人なのか、それとも夫婦なのか、はたまた不倫なのか。言動から判断し動かなければならぬ。そのためお客様の違いや事情を察するのは得意だった。

玄関のドアを開けて外に出ると、湿った空気が肌を撫でる。帰ってきたときは不快にも思わなかったのに、今は肌にまとわりつくような感覚にイライラした。

一華はため息をつき、ドアが閉まっているのを確認して、明彦と向き合った。

「悪いけど、結婚はなかったことにしてほしいの」

「えっ、なぜ？」

明彦は驚いた表情で理由を尋ねる。

「あなたを信用できなくなったから。……さっき、写真を撮ってたとき、美智と詩織ばかりにスマホを向けていたのはどうして？ それに、詩織の脚に触ろうとしてたわよ

ね？」

「ち、違うんだ。大きい子たちはあとで撮ろうと思ってたんだよ。詩織ちゃんに触ろうとしたのは……あの、ほら、これから家族になるんだし、仲良くなるうと思つて」

「お父さんですら、そんなことはしない。もちろん、裕樹も芳樹も。あなたに、弟妹たちに近づいてほしくないの。ごめんさい」

一華が頭を下げると、穏やかだった明彦の目が吊り上がった。

「き、君まで、僕を愛態扱いするんだな！ ロリコンだとも思ってるんだろう！」

唾を飛ばさんばかりの勢いでまくし立てられるが、一華はただ押し黙る。

「少し興味があるだけじゃないか！ 相手がいやがったらちゃんとやめてる！」

「……つまり、あなたは過去にも幼い子がいやがるようなことをしていたのね？ じゃあ、あなたのお母様に確認してもいい？ 警察沙汰になったことはありますか？」

一華の問いに、明彦はぎくりと肩を強張らせた。

「やっぱりね……あなたとは二度と会わない。それと、さっきここで撮った写真を全部消して。クラウドに保存しているならそれも。今後、妹たちに近づいたら、警察を呼ぶから」

「わ、わかったよ！」

明彦はスマートフォンを操作し、画像を消去した。一華は彼の手元を注意深く見つめ

て、美智と詩織の写真が消えていることを確認する。

明彦の画像フォルダには、インターネットの拾い画像なのか、幼い子どもの写真が大量に保存されていた。あまりの気持ち悪さに顔が引き曇る。

「これでいいだろう！ だからいやなんだ、大人の女なんて！」

ぞっとするようなセリフを吐き、明彦は逃げるように走り去っていった。残された一華は脱力するように肩を落とし、深く息を吐きだした。今日、気づいて良かった。妹たちになにもなくて良かった。

安堵すると同時に、やっぱりと諦めの気持ちが生まれ、苦い笑いが漏れる。

(最初からわかってたじゃない。簡単にはいかないって。私は小さな子を抱えたシンダルマザーのようなものなんだから。近づいてくる人には、裏があるって思った方がいい) 諦めるのは得意だ。家事に育児に仕事。すべてをこなすには、恋愛や友人付き合いを諦めるしかないとなわかっていたのに、望んでしまった。もしかしたらと期待をしてもまった。

ため息と共に涙が滲んだ。あんな人にしか必要とされない自分が哀れで、虚しかった。不意に全身がずんと重くなったような感覚がした。両肩にのしかかるのは家族の重みだ。けれど、唇を噛みしめ耐える。泣いていたら弟妹たちを心配させてしまう。

(私……逃げたかったのかな。この環境から)

明彦に「父親代わりになる」と言われたとき、これで子どもたちの面倒を見てくれる手が増えたと喜んだ。自分にとって都合のいい男性と結婚ができるという、浅はかな考えがあった。

今、一華の胸にあるのは悲しみなどではない。結婚がなくなり、将来への展望が真っ黒に染まっていくような喪失感と絶望感だ。

(あの人と結婚しなくて良かったって……心底思うのにな)

きつと、疲れているだけだ。諦めた方が楽だと知っているじゃないか。恋愛も結婚も自分には無理なのだ。少なくとも、亜樹がもつと大きくなるまでは。

(だから……あと何年よ、それ)

なにかかもを放り出して逃げてしまいたい。弟妹たちを可愛いと思うのに、どうして自分ばかりが苦勞をしなければならぬのか、という恨みがましい気持ちもあって——ふたたび涙が滲みそうになり、一華は空を見上げて深い呼吸をする。

仕方がないことだ。自分は長女で母親代わりなのだから。

そう自分に言い聞かせているうちに、涙は止まった。

(そろそろ戻らないと……ご飯、待ってるだろうし)

気持ちを切り替え一華が玄関を振り返ると同時に、内側からドアが開いた。

「姉ちゃん？ なかなか戻ってこないけど、どうかした？」

玄関から顔を出したのは裕樹だった。亜樹の寝かしつけが終わったのだろう。「ううん、なんでもない。今日はいろいろ任せちゃってごめんね。バイトも休んでもらったのに」

「いや、それはいいけどさ。もう飯できたって」

裕樹は、赤くなった一華の目に気づいたのか、気まずそうにリビングに目を向けた。どう考えても明彦が帰るタイミングはおかしかったし、ケンカをしたとでも思ったのかもしれない。

「わかった、ありがとう」

「亜樹の風呂で濡れたから、俺も入ってくるわ。先に食ってて」

そう言って、裕樹は脱衣所へ行った。

一華がリビングに入ると、ふたばと美智がテーブルに料理を並べている。

「ふたばも美智も、全部やらせてごめん。あとは私がやるから」

「あとご飯よそうだけだから、たまにはいいよ」

美智がにかつと笑う。一華は美智の髪を撫でるように軽く梳き、ありがとうと返した。「姉ちゃん、遅えよ！ 腹減ったし！ つうか、さっきのおっさん帰ったの？ 結婚の挨拶に来たんだろ？」

先ほどまでふたばとケンカをしていた芳樹は、すっかりとそんなことを忘れたように

詩織とお菓子を食べ、テレビを観ながら言った。

美智と詩織はなにも気づいていないようでもっとする。あと少し気がつくのが遅かったら、なにをされていたかわからない。

（ちよっとだけ、一人になりたいな）

一連の出来事でやけに疲れてしまった。今は誰にも話しかけられたくないと思うものの、弟妹たちは放っておいてはくれない。

「思ったんだけど、あのおっさんなんかキモくね？ あんなのじゃなくて、もっといい男を選べば？」

思わず、うるさい、と口から出かかった。もっといい男を選べるなら、とつくに選んでいると。吐く息が震えて、気づけば肩で息をしていた。

（母親代わりなんて、したくてしてるわけじゃない。でも、私しか、やる人がいないから……）

我慢して抑えてきた感情が一気に溢れだす。決して口にはいけない言葉が出てしまっいそうになり、震える唇を噛みしめた。

いつもなら芳樹の軽口くらい反抗期だからと聞き流せるのに、それができない。あんな男しか選べない自分が悔しくて、悲しくてたまらなかつた。

「それに全然そういう話してねえけどさ、姉ちゃん結婚したら誰が飯作んだよ」

頭の中でなにかがぶつりと切れた音がした。怒りで目の前が真っ赤に染まる。もういやだった。なにもかまがいやでたまらなかつた。

「そんなの……」

「は？」

「そんなの知らないわよ！ どうしていつも私ばかり！ 私だって、好きであなたたちの母親代わりしてるわけじゃない！ 誰の面倒も見なくていいなら、とっくにもっといい男と結婚して、こんな家出ていってらわよ！」

一華は肩を震わせながら一気に言った。我慢しようと思っていたのに、一度口を衝いて出た言葉は止められなかつた。

「……っんだよ、それ！」

リビングがシンと静まり返る中、芳樹が勢いよくテーブルを叩く。ばんっと大きな音がしたあと、詩織がぐすぐすと泣きだした。

「わかつてたよ！ 姉ちゃんはどうせ、俺らがいるから結婚できないって思ってるって！ 母親代わりを押しつけられて迷惑だって！ だったら俺らなんて捨てて兄ちゃんみたいに家を出ていけばいいじゃんか！ 悪かつたなっ、邪魔者で！」

芳樹は目を真っ赤にして、泣きそうな顔で叫んだ。

「ちが……っ」

芳樹の慟哭が伝染したかのように、今度は美智が泣きだした。ふたばは近くにいて美智を抱き締めながら、心配そうにこちらを見ている。芳樹は背を向けて荒々しくリビングを出ていった。

「芳樹っ！」

「うるせえっ！」

階段を上がっていく苛立ちがこもった足音のあと、勢いよくドアが閉まる音が響く。

ドアの音で起きてしまったのか、亜樹の泣き声が二階から聞こえてきた。亜樹を抱っこして、もう一度寝かしつけないと。今日は、風呂も歯磨きも裕樹に任せてしまったのだから。

そう思うのに、足が動かなかった。

（泣き止んでよ……なんで泣くの）

いつもなら可愛いと思うのに、亜樹の泣き声さえうるさく感じる。今、亜樹のところに行ったら、この気持ちをぶつけてしまえばそれで動けなかつた。

（もう、いやだ……いなくなりたい）

美智と詩織、それにふたばも不安そうな顔をしてこちらを見ていた。フォローしなければと思っても、口も身体も動かない。

弟も妹も大事なのに、彼らさえいなければと思う気持ちが、いつもどこかにあった。

母が亡くなる前に結婚し家を出ている兄が羨ましかった。「お兄ちゃんは結婚したんだから仕方がない」——そう言いつつも、心のどこかで兄だけここから逃げられるのはずるいと思っていた。

そんな浅ましい考えを知られたくなくて、まるで仕事のように日々のルーティンをこなしていた。でも本当は苦しかった。誰かに助けてほしかった。

そんなとき明彦と出会ったものの、その期待を裏切られ、失望し、家族に当たるだなんて。

(私……なにしているんだろう……ちゃんとしなきゃ)

「ごめんね……ちよつと、外で頭を冷やしてくる。亜樹のこと、頼んでいい？」

「お姉ちゃん……ちゃんと帰ってくる？」

不安そうな顔をした詩織が涙を拭いながら聞いてきた。詩織はまだ小学一年生なのに、それでもよくないことが起きたらしいと理解しているのだ。ふたばは美智を抱き締めたまま、一華を見つめている。

「うん、もちろん。もうすぐお父さんも帰ってくるし、その辺散歩してくるだけだから。危ないから家から出ちゃだめよ。鍵はかけていくからね」

一華は詩織の言葉を待たずに背を向けた。

ショックを受けた芳樹の顔を思い出す。芳樹には帰ったら謝ろう。今は冷静に話せる

自信がない。

一華は、スマートフォンとバッグを掴み玄関を出ると、ドアをしつかりと施錠した。一人になると、しつかり者の姉、頼りになる姉の仮面が剥がれ落ちていく。

(ちよつと、疲れた……)

シンと静まりかえった玄関先で、深くため息をつく。

住宅街に人気はなく、普段なら少し怖いぐらいの夜道が今日に限ってはありがたかった。

一華はとぼとぼと歩きながら、星のない空を見上げた。

胸が苦しくて、吐く息が切なく震える。それなのに涙はこぼれなかった。

(お母さん、ごめんね……私、お姉ちゃんなのに。ちゃんと、お母さんの代わり、しなきゃいけないのに、全然できない)

母が亡くなったときのことを思い出す。

弟妹たちを慰めることや生活を整えることに必死で、母の死を悼む時間なんてまったくなかった。母だってきつと、一華に弟妹たちの面倒を見てほしいと思っただけだ。

無意識に通い慣れた道を歩いていたようで、商店街の明かりが見えてくる。

早く家に帰らなければみんなが心配する。

そう思っても、顔を合わせたらもっとひどい言葉を投げつけてしまいそうで怖かった。

(もう少しだけ、外にいいいな)

一華は商店街を通り、駅の方へと足を向ける。すると、スマートフォンを着信音が響いた。明彦が連絡してきたのかもと、恐る恐るスマートフォンを見ると、着信は父からだった。

「お父さん？ ごめん、少し外に……」

『あいつらから事情を聞いた。帰るのが遅くなって悪かったな』

「ううん、それはいいの。私もそろそろ帰るから、心配しないで。あと、悪いんだけど……結婚、なくなつたから。みんなにも伝えておいて」

『そうか、わかつた。一華はいろいろ溜め込むからなあ。今日は帰って来なくていいからばあつと遊んでこい。ほら、前に憧れているって言ってたホテルとか。どうせ食事もしてないんだろ？、行ってみたらどうだ？』

精一杯、氣遣つてくれてるのだろう。たしかに気分転換にはなるかもしれないが、芳樹を傷つけておいて自分だけ遊びに行くなんてできない。

「でも、芳樹に謝らないと」

『んなの、明日でいい。あいつだつて自分が言い過ぎたつてちゃんとわかつてるよ。それに、一華の言葉が本心じゃないつてことも。お前は一人で頑張りすぎなんだ、家事も育児もしつけれ。それを、全部お前にやらせてる俺が言えたことじゃないんだが……芳

樹のフォローはしておくから心配するな。むしろ、こんなときにしか役立てない親父で悪いな』

ゆっくりしてこい——その言葉を最後に電話が切られた。

一華はしばらくの間、本当に家に帰らなくていいのだろうか？とスマートフォンを見つめた。

遊びに行くような気分ではない。ただ、このまま家に帰るのも気まずかつた。

明日は仕事も休みだし、芳樹が寝た頃に帰り、朝食のタイミングで謝る方がいいかもしれない。

(ホテルか……せっかくだから、行こうかな)

まだ時間も早い。ふと、一人で夜に街を歩くこと自体が数年ぶりだったと気づく。一華の生活はずつと弟妹たちと共にあったから。

一華は最寄り駅から地下鉄に乗り、ブランドフロントイアホテル&リゾート東京のある港区内の駅で降りた。駅構内にあるアパレルショップを見ながら、ぶらぶらと歩く。

(こんな風に、ゆっくり服を見るのも久しぶり)

なかなか時間が取れないため、自分の服はすべて通販サイトで購入していた。

制服は上下黒のスーツにスカートのスタイルだが、中に着るブラウスやシャツは自前で色は白と決められている。

支給品とは別に自分好みのスカーフを購入し身につけるのが、フロントサービス係の間でちょっとした流行となっていた。

いくつかのスカーフを手に取り即決すると、レジに持っていく。時間に追われているわけではないのに、会計を済ませるまで五分もかかっていない自分に苦笑が漏れた。

(明後日、仕事の時に使おう)

新しいスカーフを身につけられると思うと、幾分か気持ちいくぶんが浮上してくる。

やがて目的のホテルへ到着し、上層階にあるホテル直営のバーに向かった。

空腹ではあったが、今は腹を満たすより酔いたい気分だった。それにバーでもなにかな摘まめるものがあるだろう。

店内は淡い明かりに照らされていて落ち着いた雰囲気だ。カウンター席だけでなく、円テーブルを囲うように置かれたベルベット調の一人用ソファがいくつもある。カウンターの一段高いステージにグラランドピアノが配置されており、土日祝日に来ればピアノによる演奏が聴けるようだ。

一華はカウンター席に案内され、メニューを手渡された。テーブルにスマートフォンを置き、先にカクテルを注文してからメニューをのんびりと眺める。

(サンドウィッチくらいはあるかな)

しかしメニューにあるのは、チーズやナッツといった酒のつまみとなる付け合わせが

数種類とデザートのみ。やはりレストランで食事をしてくればよかったと後悔したが今さらだ。

「食事メニューは、これだけですよね」

わかっていながらも、カウンター越しに立つバーテンダーに聞いてみる。すると彼は、まったく気を悪くした様子もなくメニューを捲めくった。

「軽食でしたら、こちらのクロックムツシユとクラブサンドウィッチはいかがでしょうか」

どうやらページがくつついていたようだ。

「ありがとうございます。じゃあ、クラブサンドウィッチと温野菜のサルサ・ロハを」
サルサ・ロハはメキシコ料理によくつくってくる赤いソースのことだ。辛みがあって酒のつまみによく合う。

「かしこまりました」

バーテンダーは折り目正しく腰を折った。姿勢が非常に美しく、所作に荒っぽさがまったくない。厨房に注文を伝えに行き戻ってくると、一華の空のカクテルグラスを見て、ドリンクメニューを広げてくれる。

「追加のドリンクはいかがですか？」

「じゃあ、マティーニをいただけますか？」

「かしこまりました」

バーテンダーはカクテルグラスに氷を入れて、グラスを冷やしたあと、ミキシンググラスに氷と酒を入れた。

ミキシンググラスをかき混ぜる手は洗練されており、マドラーがグラスに一度も当たらない。グラスの中で音も立てずに氷がくるくると回る様子は、一華の目を楽しませてくれた。

「すごい」

一華が感嘆の声を上げると、照れた様子で微笑みが返された。

「ありがとうございます」

カクテルを作っている様子を見せるのは一種のパフォーマンスのようだ。バーテンダーの楽しんでもらいたいという思いが伝わってくる。客としてホテルの直営店を利用するのは、諸先輩方が言うようにとても勉強になる。

カクテルグラスを傾けると、爽やかな香りが鼻をくすぐった。一口飲むと、口の中がすつきりするようになり、運ばれてきたサンドウィッチと温野菜を摘まんでまた次の酒を頼む。つい酒が進むのは、いくら飲んでも酔えそうにないからだ。

(もっと楽しい気分でここに来たかった……まあ自業自得なんだけど)

テーブルに置いたスマートフォンホームボタンをタップするが、着信は一件もなかった。

(芳樹……怒ってるかな。またふたばとケンカしてないといいけど。せっかくお父さんが気分転換に言ってくれたけど……そんな簡単に切り替えられないよ)

やはりすぐに追いかけて謝ればよかった。一人であるからよけいにマイナス思考になっていくのかもしれない。家族を大事に思っている気持ちはどうじゃないのに、もしも母が生きていたらと、何度も何度も考えてしまう。

もっと自由に恋をしたい。長期の休みには、贅沢に全国各地のホテルを見て回りたい。そんな本音は、弟妹たちの前ではとても口には出せなかった。彼らだって、一華と同じように我慢をしていることはたくさんある。

「同じものを」

空いたグラスを置いて、バーテンダーに声をかけた。

酔ってしまえば、落ち込んだ気分ごと忘れられるだろうか。そう思いグラスを重ねていく。

そしてグラスを何度か空け、カクテルの味がわからなくなった頃、突然、隣から伸びてきた腕に背中を支えられた。

「だいぶ酔っているでしょう。大丈夫ですか？」

声をかけられるまで、自分の隣に人が座っていたことにも気づかなかった。ずいぶんと心地好い低い声だなど、ほんやりとした頭で考えながら一華は隣に視線を向ける。

「飲み過ぎですよ。危なっかしくて、つい声をかけてしまいました」

気づくと、黒のスリーブに身を包んだ、彫りの深い顔立ちをした男が、一華の手からカクテルグラスを奪い取っていた。

真っ直ぐで癖のない黒髪は左右に分けられていて、前髪の隙間から覗く瞳は髪と同じ色だ。

（誰？ すごい美形）

近づきたい鋭さのある美貌を持ちながら、にこにこ人懐っこい笑みを浮かべる様子はどこかアンバランスなのに、こちらのテリトリーにいつの間にか入ってきて、気づいたら友人になってしまえるような雰囲気があった。テーブルに肘を突いて首を傾げる仕草が、やたらと官能的で目が離せなくなる。

だが、そんな男がどうしてこの広い店内で一華の隣に座り、声をかけてくるのだろうか。自分の美貌に自信満々な唯ならばわかるが、一華はそこまで目を引くような外見をしていない。

「大丈夫です。そこまで、酔っていませんから」

酔っ払って家に帰れなくなるような真似はしない。そう思っていたのに、彼の手が背中から離れると、ぐらりと頭が揺れて椅子から倒れそうになった。

「……っ」

自分一人ではまともに座ってられないほど酔っていたらしい。酩酊状態であることを自覚すると、先ほどまでは冴えていた頭が霞がかかったようにほんやりとしてくる。

「ほら、大丈夫じゃないでしょう？」

男はくすくすと笑いながら「ね？」と言って、ふたたび一華の背中に手を添えた。カクテルグラスを遠ざけられて、バーテンダーに頼んだ水を目の前に置かれる。

「ありがとうございます」

一華は勧められるままにグラスの水を飲み、ほっと息をつく。喉を流れていく冷たい水が心地好い。そういえばグラスが空くたびに新しいカクテルを頼んでいて、自分が何杯飲んだかもすでにわからなくなっている。

いやな記憶を消し去ろうと杯を重ねた結果だが、明彦と別れたことも、芳樹を傷つけてしまったことも、残念ながら鮮明に覚えていた。

「お酒で忘れたいことでもありましたか？」

男性がさらに話しかけてくる。こんな酔っ払いに話しかけるなんてよほどの物好きなのか。

一華は男を一瞥すると、苦笑を浮かべて頷いた。どうせもう二度と会うことのない相手だ。それに、誰かと話をしていただけの方が酩酊した頭もすっきりするかもしれない。そう思い言葉を返した。

「結婚の話がなくなつて、その結果、家族を傷つけて……悲嘆に暮れているところです」
取り繕った笑みを浮かべた一華に、男は気の毒そうな目を向けた。茶化すでもなく、親身になるふりをするでもなく、ただ痛ましそうに見つめられると無性に泣きたくなる。「そんなに唇を強く噛んだら、切れてしまいます」

男が一華の唇にそっと触れてきた。突然触れられて驚いたものの、彼の持つ雰囲気の違いが警戒心が湧かない。パーソナルスペースに入っただけでも不思議と不快には感じなかった。

強張った口元から力を抜くと、舌先にざらついた感触がある。何度も噛んでしまったせいも、皮が剥けてしまっていた。

「悲嘆に暮れているのに、涙の跡がありませんね」

「それは……」

自分に泣く権利などないと、わかってしまったからだ。言葉にすることなく唇に力を入れると、ふたたび男の指先が「だめ」と言うように唇に触れた。

「泣けなかった？」

「はい……我慢することに慣れてるから、でしょうか……泣くに泣けないっていうか。泣いても、なにも解決しないってわかってるので」

「我慢？ どうしてですか？」

一華は深く息を吐き、男を見つめる。一華が話したのを待っている様子だ。

促されるようにぼつぼつと話していくうちに、気づけばすべてを打ち明けていた。隠していた胸の内まですべて。もしかしたら酔って忘れるよりも、一華は誰かに話を聞いてもらいたかったのかもしれない。自分の愚かさや汚さを、誰かに許してほしいかったのかも知れない。

「……それで……家族を第一に考えていたつもりなのに、弟に『あんなのじゃなくて、もっといい男を選べ』とか『結婚したら誰が飯作るんだ』って言われたとき、つい、カッとなつてしまったんです。弟に八つ当たりして……私、最低なんです」

ここまで話したところで、張り詰めていた糸がぷつりと切れてしまった。

お姉ちゃんだから。ほかにやる人がいないから、仕方なく母親代わりをしていた。そんな自分の現状に不満を抱えていた。

それを弟妹たちに言うつもりなんてなかったのに。いくら気持ちが悪く荒れていたにしても、言葉を選ぶべきだった。

裕樹もふたばも下の子たちの面倒を見てくれる。芳樹だって美智だってそうだ。一華

立ち読みサンプル はここまで